



With you

ウィズユー

日本UNHCR協会ニュースレター

No.6 2005年 第3号



目次

スーダン難民に緊急支援を！	2
新難民高等弁務官就任	
自然環境を守る	3
—24年目の「みどり一本」運動	
アフリカで活躍する日本人職員	
アフリカ難民に教育を！	4
名称変更のお知らせ	5
助っ人会員登録団体の活動紹介	
支援者の声 / ご寄附の方法	
アジアの難民	6

日本国連HCR協会は2005年9月1日より
ユー・エヌ・エイチ・シー・アール
 日本UNHCR協会と名称変更しました。

スーダン難民に緊急支援を!

日本UNHCR協会では、2004年3月より、スーダン西部ダルフル地方からの難民支援を呼びかけています。UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は、チャドに逃れた難民約22万人に加えて、スーダンでも国内避難民の保護に取り組んでいます。UNHCR本部のスーダン・チャド特別事業ダルフル担当である河原直美さんに、支援の現状をお聞きしました。



UNHCR協会でお話くださった河原直美さん



民兵に襲撃されて、焼き払われたダルフルの村
UNHCR / K.Mckinsey

Q.ダルフル地方でのUNHCRの活動について教えてください。

A. UNHCRは2004年6月にダルフルでの事業を開始しました。昨年10月には、国連事務総長から正式に西ダルフル地方の国内避難民支援を要請されました。また今年1月には、スーダン政府との間で、西ダルフル地方での国内避難民支援に関する覚書を取り交わしました。支援を必要としている国内避難民は187万人いるといわれていますが、おもに西ダルフルの70万人がUNHCRの援助対象となっています。UNHCRには、避難民の集落をひとつひとつ訪問し、安全が保たれているかどうかをモニターするという重要な役割があります。これは住民の安全を国際社会が監視していることを示すことにもなります。性的虐待、あるいは子どもの虐待など、個別のケースのケアも、現地政府と交渉しながら行っています。女性を支援するための女性センターも避難民キャンプや集落に23件設立しました。また、これまでにチャドやスーダン内の避難先から自発的に自分の村に戻った約1万9000人の帰還民が、再びチャドや他の地方に流出する必要のないように、特にコミュニティを重視しつつ、井戸や学校、診療所などの整備を通して生活再建を支援しています。

Q.支援に必要な資金状況はいかがですか？

A. 現在、スーダン難民(国内避難民)に関しては、3つの支援事業が進められています。スーダンの南部、ダルフル地方、そしてチャド東部です。8月4日現在の

実績ですが、難民の帰還が始まっているスーダン南部の場合、予算7600万ドルのうち3200万ドル(43%)が集まっていますが、チャド側は予算8100万ドルのうち4600万ドル(57%)、ダルフルにいたっては3100万ドルのうち990万ドル(32%)しか集まっていないのです。現場に保護担当官を派遣するために、

国境沿いに6つのオフィスを設置する計画が承認されているものの、砂嵐の吹き荒れる砂漠地帯で仕事を進めていくうえで不可欠の車や事務所・宿泊施設、コンピューター機器といった設備を整える資金も足りず、計画を進めることができない状況です。

Q.河原さんご自身も現地を訪問されたそうですね。

A. 6月に1週間の出張で、首都ハルツームとダルフル地方に行きました。UNHCRが拠点を置いているエルジェーナ(Al Geneina)を空から眺めると、集落が点々と見える砂漠地帯でした。すでにUNHCR職員は国際スタッフ15名を含む60名が現地で活動しています。しかし、車がないと移動さえできない場所に、車が充分にありません。スタッフの安全を守るためには、防弾ガラス、通信設備、GPSといった安全設備を備えた車が必要不可欠です。資金難から必要な台数の車を確保で

きず、コンピューターもたりない事務所では、思うように仕事ができないこともあり、人々への支援にも限界がでてきます。

Q.河原さんはこれまでに、ルワンダ、アルバニア、ミャンマー、バングラデシュのUNHCR現地事務所です仕事をされたとのことですが、ダルフルでの支援事業をどのように感じていますか。

A. 今まで経験した中でも最も厳しい事業だと思います。避難民の生活、政治状況ばかりでなく、砂漠の嵐が吹き荒れ、援助物資の輸送やスタッフの移動だけでも大変な労力を要します。

Q.日本の支援者の皆様にメッセージをお願いします。

A. 支援を必要としている人々がいることを知りながら、見捨てることはできません。ほんの少しの資金でも、多くの人々の協力によって、大きな力となります。どんなに大変な状況であっても、国際社会が彼らを見捨てていないという連帯感を示していくことが必要です。ぜひ一人でも多くの方々に関心を持っていただきたいと思います。

スーダン難民緊急支援

ご支援ありがとうございました。

ご寄附: 1538万9175円 件数: 1163件

(2005年1月1日~7月30日)

ご寄附は「スーダン難民」とご指定ください。

*引き続き「緊急ファンド」もスーダン難民緊急支援に充当させていただきます。

新難民高等弁務官就任

国連総会で第10代国連難民高等弁務官に選出されたポルトガル元首相のアントニオ・グテーレス氏が、2005年6月、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)ジュネーブ本部に着任しました。グテーレス氏はポルトガル首相の他にも欧州理事会議長を務めるなど、20年以上も公職で活躍してきました。1949年ポルトガルの首都リスボン生まれ。

またUNHCR駐日事務所に、新しい駐日代表ロバート・ロビンソン氏(米国)と副代表岸守一(きしもり はじめ)氏が着任しました。



グテーレス第10代難民高等弁務官
UNHCR / S.Hopper

自然環境を守る —24年目の「みどり一本」運動



苗木を育てる難民女性

©UNHCR

1 1970年代末にアフガン難民300万人以上が隣国パキスタンに逃れたとき、流入した地域一帯で灌木までもが炊事のための薪や家畜の飼料として使われてしまったことにより、深刻な自然環境破壊と、難民と地元民との軋轢を引き起こしました。そこでUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)はパキスタンにおけるアフガン難民援助の一環として、植林プロジェクトを開始しました。

「みどり一本」という呼び名は、UNHCRの植林事業を支援するため、犬養道子さんが「みどり一本」運動と称して、各方面に支援を呼びかけてくださったことが始まりです。以来24年間、多くの皆様に継続的な心温まるご支援をいただきましたことは、長年UNHCR側において担当させていただきました者にとりまして、本当に嬉しく頭の下がる思いです。「貧者の一灯」と言いつつ継続的に大きなご寄



UNHCR / R.Hakozaki

改良かまどを使った調理

附をくださる方、家族全員のお名前を記される方など、多くのご支援に支えられ、励まされ、今日に至ってお

ります。長年にわたりご支援くださっている皆様に心から御礼申し上げます。

パキスタンの植林事業は、1987年に現地政府と世界銀行の共同事業へと引き継がれました。その後、「みどり一本」運動は、エチオピア難民が流入したスーダン東部の自然破壊を防止するために1985年に始まった植林事業を資金面から支えています。

スーダンでは、政府機関であるスーダン森林公社(FNC)が中心となり、地域社会の中で、難民と地元住民の協働事業として発展して20年、荒廃していた原野に緑が戻り、キャンプ内も家庭菜園や果樹などに囲まれ、少量でも建材として市場に出荷できるようになりました。売上は植林事業の費用の一部に充当されています。また、主な働き手である難民女性や地元住民は、植林事業から得る賃金を家計の足しにしています。

難民の人々は一般的に石を3つ並べただけの簡単なかまどで調理しますが、これは非常に熱効率が悪く、薪が余計に消費されてしまいます。薪の消費が少なく済む「改良かまど」の活用が、地域の講習会などによって浸透し始めています。改良かまどといっても、ドラム缶を切り抜いたものや土を固めたものですが、熱効率が良くなります。

このように難民問題と環境問題は密接に関係しています。UNHCRの植林・環境保護活動を今後とも支えていただけますようお願い申し上げます。

日本UNHCR協会参与 谷口朋子
(約20年間UNHCR駐日事務所勤務、2001年退職。現在は日本UNHCR協会参与として「みどり一本」担当)

スーダン東部以外でも、難民受け入れ地域の自然環境が悪化する例は後を絶ちません。例えば、水不足が続くチャド東部に2003年以来スーダンのダルフル地方から難民21万人以上が流入し、連れてきた家畜のために過放牧の状態となっています。UNHCRは、難民キャンプ近くの12カ所の村に苗床を設置し、20万本以上の木を育てる事業を始めました。「難民たちはチャドの人々に何かを残したいと願っています。いつの日か難民が故郷に戻っても、温かく受け入れてくれたチャドの人々への感謝の印として、木はここに残るでしょう」。現地のUNHCR環境コーディネーターの言葉です。

みどり一本

ご支援ありがとうございました。
ご寄附：257万9455円 件数：203件
(2005年1月1日～7月30日)
ご寄附は「みどり一本」とご指定ください。

アフリカで活躍する日本人職員

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の日本人職員である渡部正樹(わたべまさき)さんは、2004年9月以来ザンビアの首都ルサカに赴任しています。休暇で日本滞在中の2005年7月22日に当協会を訪問されたときに、現地のお話を聞きました。

UNHCRからザンビア政府に派遣される形で、陽気なザンビア人に囲まれながら、2002年にUNHCRとザンビア政府が始めた「ザンビア・イニシアティブ」と呼ばれる新たな試みに取り組んでいます。

ザンビアは独立以来一度も戦争をしたことのない平和な国です。国内の難民約15万人の多くは、1960年代にアンゴラから逃げて来た人々です。ようやく安定を取

り戻しつつあるアンゴラに帰ることを希望する難民が多い一方、定住を希望する難民にはその道も開かれています。難民が地元コミュニティと共存しながら自立していけるよう、難民と地元コミュニティの双方を対象とした生活基盤強化のための援助を、住民参加型で実施しています。

プロジェクトの実施が遅れがちなる村に出向いたとき、「プロジェクトに貢献をしたいがお腹がすいてそれどころではない」と訴える住民に、「このプロジェクトは世界中の人々が注目しています。どうか誇りを持って取り組んで困難を乗り越えてください!」と話しました。自助努力を支援し、住民に力をつけてもらうこと(empowerment)がこうした国際協力の真髄だと思います。



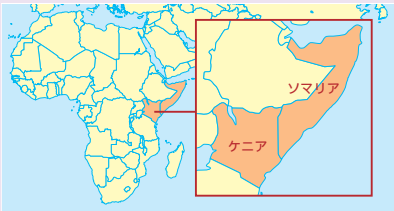
ザンビアの人たちと渡部さん

(渡部さん提供)

日本政府が「人間の安全保障」という理念を実践する場として援助資金を出す一方、JICA(国際協力機構)は村落開発分野での技術協力を進めており、まさに日本全体として応援しているプロジェクトだと感じます。その最前線でUNHCR職員として仕事をしている自分の経験を、応援してくださっている日本の皆様に伝えていきたいと思っています。

*ご寄附は「アフリカ」とご指定ください。

アフリカ難民に教育を！



ケニアのダダブ難民キャンプにはソマリア難民約14万人が暮らしています。学齢期に達する女子の場合、早い結婚、通学用の服や生理用品の欠如、教育への無関心などが重なり、学校に通っている数は半数程度です。

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は、ダダブ難民キャンプ全体としての教育支援事業に加えて、民間からの支援金を活用しつつ、女子に重点を置いた施策を進めています。

2005年から3年間の目標として、新しい教室64と就学生徒2560人の増加、教科書1万4928人分の配布などを設定する他、女子のスポーツ参加を奨励する活動を実施します。

そのダダブ難民キャンプに勤務するUNHCR職員、高島由美子さんから、「一人のソマリア難民青年が米国のプリンストン大学への入学を許可された！」との話が伝えられました。今回は男性ですが、将来は女性にも同様の道が開かれるかもしれません。

難民キャンプから 米国東海岸の大学へ

アバス・ハッサン・モハメッド氏は、1982年にソマリア南西部で生まれたが、内戦によって家族との穏やかな暮らしは壊され、1992年にダダブの難民キャンプにたどり着いた。暴力、砂埃、周りの人々が次々に死んでいく光景が、アバスの脳裏には焼きついている。

その年から、黒板もチョークもノートも鉛筆もないキャンプ内の学校に通い始めた。1997年、UNHCRがケニアのカリキュラムを難民キャンプの学校に適用したことで、キャンプ内での学校教育が公式に認められるようになり、1999年のケニアの初等教育認定試験では、アバスが地域で2番の成績を

修めた。

2000年、アバスは中等教育課程に進むことができた。資金不足から皆に機会が与えられるわけではない中で幸運だった。その後アバスは頭角を現し、ケニア大学入学資格試験では全国で8位、北東部で1位となる。アバスは学校に通い、スポーツをし、ときには気温47度もある炎天下で2週間分の食糧配給を受け取る列に何時間も並んだ。キャンプには電気がなく、暑い日中にテーブルもない家で勉強するしかない。彼の家には2部屋しかなく、祖母やいとこを含む11人の家族と一緒に暮らしている。

中等教育を終えてからのアバスの日々は、他の多くの若者と同じく、希望もなくキャンプでの日々を過ごすだけだった。ケニア人でさえ、大学に進学できる機会に恵まれる者は少ないのだから。

そんな中、2003年にカナダのヨーク大学から一人の教授がダダブを訪問し、現地で教育事業を担当するNGO(CARE)が提出した大学入学資格試験合格者リストに掲載されていた2名の学生に、プリンストン大学への入学申請を奨めた。アバスは、幸運にもちょうどナイロビに来ていた同大学の講師からインタビューを受けることができた。とうとう入学申請は受理され、大学の学費支援事務局が、アバスが必要とする学費すべてを出してくれることが決まった。

千載一遇のチャンスだが、困難な挑戦であることをアバスは承知している。難民キャンプからはインターネットアクセスがないため、大学のホームページを見ることもできない。まだ米国に入国するためのパスポートもビザもない。しかし、アバスは大学で生物学を学べる日が来ることを指折り数えて待っている。

13年間も難民キャンプという鉄条網の中で暮らしてきた青年にとって、米国ニュージャージーでの大学生活は、考え方の違いや言語を初めとする数々



難民キャンプの教室

UNHCR / L.Merieau

の困難に満ちたものとなるだろう。しかしアバスは、ダダブの教師たち、友人、家族、NGOスタッフなど、支えてくれる仲間たちに感謝している。皆の努力のおかげで、ありえないような話が実現するのだから。

アバスのような機会に恵まれる難民の若者がもっと増えることを願いながら、UNHCRは仕事を続けている。

(UNHCRダダブ事務所報告をもとに抜粋翻訳)

アフリカ難民に教育を！

ご支援ありがとうございました。

ご寄附：988万0509円 件数：155件

(2005年1月1日～7月30日)

ご寄附は「アフリカ教育」とご指定ください。

アフリカ難民に水を！

ご支援ありがとうございました。

ご寄附：492万8247円 件数：430件

(2005年1月1日～7月30日)

ご寄附は「アフリカ水」とご指定ください。



水をきれいにする錠剤

©UNHCR

アフガン帰還民支援(住宅再建)

ご支援ありがとうございました。

ご寄附：404万5238円 件数：169件

(2005年1月1日～7月30日)

ご寄附は「アフガニスタン」とご指定ください。

アフガン難民支援と帰還民住宅再建支援をまとめて集計しました。

*今回は紙面の都合上、ホームページに新しい記事を書きました。ぜひ、そちらもご覧ください。

名称変更のお知らせ

「日本国連HCR協会」から「日本UNHCR協会」へ

「日本国連HCR協会」は、国連の難民支援機関である「UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)」の日本における公式支援窓口として2000年10月に設立されました。

当初は、UNHCRが国連の機関であることを理解してもらうことが重要と考え、「UNHCR」の「UN」を「国連」に置き換え「日本国連HCR協会」としました。その結果、「HCR」が分かりにくいという声も皆様からいただきました。そこで少しでも分かりやすくするため、この度、9月1日付けで「UNHCRの日本の協会」ということで、簡明に「日本UNHCR協会」としました。英語では、「Japan Association for UNHCR」あるいは、「Japan for UNHCR」と表記します。

「UNHCR」は、「United Nations High

Commissioner for Refugees」の頭文字ですが、ユニセフやユネスコのようにカタカナ表記ができない、言いにくいなど、日本の皆様にとって馴染みにくい名称かもしれません。UNHCRという名称が日本でも定着し、国連の難民支援機関であることを多くの人々に知っていただけるように、「日本UNHCR協会」と変更しました。そして日本の多くの人々が、世界の難民の人々に対する関心と理解を深め、連帯の意識を持って、人道的な支援の輪が広がっていくことを願っています。

長年ご支援いただいている皆様には、今回の名称変更についてのご理解と、今後とも変わらぬご支援のほどよろしくお願いたします。

日本UNHCR協会
常務理事・事務局長 櫻川勝也

支援者の声

毎年6月20日は「世界難民の日」です。UNHCR駐日事務所では、その前後にUNハウス(国連大学ビル)で難民の写真展を開催しています。今年ご来場いただいた方の声をご紹介します。

偶然前を通り、立ち寄ったのですが、写真展を見て心を動かされました。日本に暮らしているとなかなか気が付かないことを写真が教えてくれました。喫茶店でお茶を飲もうと思ったのですが、その分を寄附させていただきます。少ないですが難民救済にお役立てください。(東京都 小川勇様)

編集部：ご支援ありがとうございます。一人でも多くの方々に、難民問題やUNHCRの活動を知っていただくために毎年写真展を行っています。来年の写真展にもぜひお立ち寄りください。

助っ人会員登録団体の活動を紹介します

SHRET(シュレット)

2002年、難民教育基金(Refugee Education Trust-RET)事務局長の来日を機に、聖心女子大学にて発足した学生団体です。「難民の中・高等教育の重要性」とRETについて、より多くの方々に知ってもらう目的で設立されました。RETとは、2000年12月にUNHCR 50周年記念事業として、緒方貞子第8代難民高等弁務官の提唱によって設立されたスイスの民間組織です。難民の子どもたちに中・高等教育を受ける機会を提供し、地域の平和と発展に寄与することを目的としています。

2005年度は、「虹の架け橋プロジェクト」

を進めています。RET支援先の一つであるパキスタンのアフガン難民の学生約50名と、都立千早高校2年生18名(選択教科)との間で、手紙・ビデオレターを交換しつつ、1年間実施します。ソニーマーケティング学生ボランティアファンドより、このプロジェクトが助成の対象として選ばれました。

夏休み前までに、都立千早高校にて3回授業を実施し、2回手紙を交換しました。初めてアフガン難民からの手紙を受け取った生徒たちは、「アフガニスタンのにおいがする」「大変さが伝わってきた」と語り、難民問題を身近に感じるようになってきました。

9月にビデオレターの交換が始まります。双方に同じテーマを与えて、それについて話し合い、その結果を録画して相手国に送ります。来年2月に今までの活動を通して何を考え、感じたかなどを皆で分かち合う予定です。

このプロジェクトへのご質問は、聖心女子大学学生団体SHRETに直接お問い合わせください。(連絡先: unshret@hotmail.com
ホームページ: <http://shret.fc2web.com/>)

*日本UNHCR協会は、難民教育基金(Refugee Education Trust-RET)への寄附窓口も務めています。
郵便振替口座:00110-4-54477 加入者名:難民教育基金

ご寄附の方法いろいろ

日本UNHCR協会は

UNHCRの公式支援窓口です。

以下の方法で、常時ご寄附をお受けしています。ご寄附は税控除の対象となります。

毎月倶楽部

恒常的資金不足にあるUNHCRにとって、毎月自動引き落としによるご寄附は非常に心強く、手数料も節約することができます。適宜お寄せくださるご寄附に加えて、ぜひご協力ください。ご希望の方には申込書をお送りします。

郵便局

振込手数料はUNHCR協会がお支払いする「加入者負担」です。

郵便振替口座:00140-6-569575

加入者名: UNHCR協会

「HCR協会」と記入された古い振込用紙も引き続きご利用いただけます。

インターネット/クレジットカード

ホームページでお申し込み後、郵便局やコンビニでお振り込みいただける用紙がお手元に届きます。あるいは、銀行振込やクレジットカードによるご寄附も可能です。

<http://www.japanforunhcr.org>

銀行

UFJ銀行 青山支店 普通口座 5251034

三井住友銀行 渋谷駅前支店

普通口座 3478195

口座名(共通): UNHCRキョウカイ
銀行からのお振り込みはお名前の一部しか表示されません。受領証やニュースレター発送のため、必ず皆様のご住所等をUNHCR協会へお知らせください。

遺贈および相続財産のご寄附
遺贈や相続財産のご寄附をお考えの方は当協会にご相談ください。パンフレットをお送りします。

6月20日「世界難民の日」-2005年度イベント報告

キャンペーン期間中(4月中旬~7月中旬)の登録イベントとして、難民写真パネル展、講演会、学習会、上映会、チャリティーイベント、街頭募金など、47件をホームページでご紹介できました。来年も「世界難民の日」関連イベントを日本各地で企画しませんか。皆様からのご連絡をお待ちしています。登録イベントの募集要項は11月末までにホームページに掲載する予定です。

長期化するキャンプ生活の中で ミャンマー・タイ国境地帯に生きる難民を訪ねて



パントラクター・キャンプ UNHCR協会 / 奥平章子



1970年代後半にインドシナ半島の政変により大量に流出した、いわゆる「ボートピープル」と呼ばれる人々を含む問題が「一応の」解決を見せて以来、アジアにおける難民の現状についてメディアなどで取り上げられる機会は極めて少なくなりました。しかし、タイのミャンマー難民をはじめ、バングラディッシュのミャンマー難民、ネパールのブータン難民、スリランカの国内避難民など、「忘れられつつある」アジアの難民・避難民の問題が、各地で依然として続いています。

2005年7月上旬、私はミャンマーとタイ国境沿いの難民キャンプを訪れました。現在、タイには、ミャンマーとの国境の山岳地帯に計9つの難民キャンプが設置され、12万人以上の難民が暮らしています。多民族国家ミャンマーから逃れてきたカレン族が7つのキャンプの、そしてカレンニー族が2つのキャンプの大多数を占めています。タイのUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は、バンコクにある地域事務所(ユニエシイショナル)の他、メーホソン、メソット、カンチャナブリの3カ所にフィールド事務所を構え、現地政府やNGO(非政府組織)との連携や調整を図りながら支援活動を展開しています。

今回私は、9つのキャンプの中でも最北部に位置するパントラクター・



メラウ・キャンプの図書館にて UNHCR協会 / 奥平章子

キャンプ、そして北西部に位置するメラウ・キャンプの2カ所を訪問しました。いずれも、メーホソン県にあります。パントラクター・キャンプは、1996年に正式に開設され、カレンニー族が約1万8000人暮らしています。現地の風土に合わせ、竹で作られた高床式の家が軒を連ね、10年近くの歳月をかけて整えられたキャンプ内の生活基盤は、地元NGOはじめ各支援機関の努力の結晶のように思われました。キャンプ内は、カレンニー難民委員会を筆頭に組織化されており、一つの社会が形成されていました。

学校は、保育園が8つ、小学校が9つ、中学校が4つ、高校が2つあり、さらに、高校を終えた人のための専門学校や職業訓練所なども自主運営されていました。キャンプ内の教育は、カレンニー教育省と教育分野のNGOとの連携により監督されています。一見すると、平和な村落のようにも見えました。

しかし、キャンプに暮らす人々と話をする中で、今最も必要としているものをきいたところ、水や食糧を挙げた人は一人もなく、彼らの口々からこぼれ落ちる共通の言葉がありました。それは、「将来への希望」「夢」そして「自由」というものでした。長期化するキャンプ生活の中で、生活に必要な物資が整えられていく一方で、日々失われていくものがあることを知りました。それは、ともすれば人間が生きていくうえで最も基本的かつ大切なものかもしれません。

パントラクター・キャンプから南へ車で3時間ほど下ったところに、メーサリアンという町があります。そこからさらに、でこぼこの山道を行くこと3時間、ミャンマーとタイを隔てるサルウィーン川を横目に見ながら、メラウ・キャンプにたどり着きます。前の晩に降った雨の影響で、キャンプへと続く山間部の険しい泥道がぬかるみを増していました。

国境から約3kmの位置にあるメラウ・キャンプは、山林の急斜面に沿って開設された地理的環境の非常に厳しい立地条件の中にありました。ここには、カレン族が大多数を占める難民約1万7000人が

住んでいます。約1年半前に、近隣のキャンプが洪水災害に遭い、そのためここに移動しました。避難してきたとはいえ、土砂災害などが心配されます。

このキャンプには、UNHCRのパートナーである日本のNGO、社団法人シャンティ国際ボランティア会(SVA)の活動する図書館が設置されていました。ちょうど小学校の隣りに建てられている図書館で、授業を終えた子どもたちが次々とやって来て、あっという間に室内を埋め尽くしました。託児所のような機能をも果す図書館で、図書館員の読み聞かせやゲームに参加する子どもたちの姿は実に楽しそうでした。また、英語、タイ語、日本語などからカレン語、ビルマ語に翻訳された本がところ狭しと並べられており、それらの本に飛びつく子どもたちの姿、夢中になって見入る姿は、「自由」のない生活の中で、「夢」と「希望」を与える「知識」に飢えた子どもたちの現状を物語っており、鮮烈な印象となりました。

2つの難民キャンプの委員長や学校の先生は、帰れる時機が来たらもちろん故郷に帰りたいが、それが許されない今、キャンプに暮らす人々の将来に希望の光を灯すことのできるもの、それは、子どもたちの教育であると口々に語っていました。長期化するキャンプでの生活は、いわゆる「緊急事態」と呼ばれる状況とは質の異なる問題を多分に抱えており、長期化すればするほど深刻さを増しています。アジアに暮らす難民の人々の苦難を少しでも和らげ、彼らに生きがいをもたらす将来への希望につなげていくため、同じアジアに住む日本の私たちが、この地域の人々の未来づくりに対してできることは、まだまだたくさんあります。

認定NPO法人 日本UNHCR協会
[国連難民高等弁務官事務所(UNHCR 国内委員会)]
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70
UNハウス(国連大学ビル)6階 UNHCR内
TEL: 03-3499-2450 FAX: 03-3499-2273
Eメール: info@japanforunhcr.org
ホームページ: <http://www.japanforunhcr.org>

「With you」No.6 2005年 第3号(9月)
発行人: 赤野間征盛
編集: 榎川勝也、中村恵、井上清治、奥平章子
デザイン・製作: 榎ポイントライン